

○弘安五年十月十三日は日蓮聖人が池上に於て説くべきことは説き訖り、靜かに寂を示された日で、今より六百六十三年前であつた。國家重大禍に際して佛體の思想信念を追憶し、其の大誓願の顯現されんことを熱望してやまぬ次第である。

○大詔奉戴記念 毎月八日朝六時、於本部祈願會と聖旨の徹底に努め、晴天の場合には七時過より支那旗を先陣にして隊伍を整へ、建國の神社に参詣するのだが、九月は生憎降雨の爲にこれを中止して法話懇談、七時半頃散會した。

○秋季彼岸會 先頃颯風の訪れに法師の聲も聞えなくなつて、晴れた蒼空を仰くと幾分かの荒寒が堪當高く飛び、町會の人や防護團の壯青年が往來も繁く、區民葬も盛ある。又本誌の編輯に就ても若干變更した。を正さしめる。晝夜正に時を同ふする此の彼岸會、皇靈祭は意義深いものであり、殊事を充實して一行でも有教にこのことから現局に臨んで吾々は一層佛國三寶の笑裏省悟することにした。改めて傾收置は差上を熱慕する。法華經の祈願に就て、經文にげなくとも本誌をお送りすれば、それで御は「諸天は晝夜に常に法の爲の故に而も之承認を願ひたい。」「前金切」又は「乞法金」

を保護したまふ」とも亦、是の經を持たん者と知らせればお拂込きたい。諸費員を擁護して、百由旬の内に諸の衰患なからしむべし、或は「諸餘の怨敵皆悉く摧滅各位の不一方御清夜に據つて日々に教縁がに汝を守護したまふ」等々。日蓮聖人の御生涯は實に經文の現證であり、又小乘古賢來に對する態度は吾も人も眞似るべきであらう。本部では二十三日の中日午後二時開

送、征戰完遂國體會並に諸精靈の追善菩提の法要後、有益な法話と最近の情勢が權威ある要職の某氏等で開陳し、多大の感憤興起を促がされた。

○毎月曜朝の清集も、萬障を排除して愛國の士女、正定案に入つて勳加精進すること油に力強く頼母しい限りである。

○月一回以上の教務部會及び編輯會議で、各方面の補強策勵乃至進出が企劃されつゝ、國費誌料等の入帳報告も成るべく本誌記

とお知らせすればお拂込きたい。諸費員の有りであつても、大法護持發揚の爲に増強されてゐることをお喜び下さい。
(再生)

一 部 金 二十錢 送料二錢
半 部 金 十錢 送料一錢
一 部 金 二十錢 送料一錢

昭和十九年九月二十七日 印刷納本
昭和十九年十月一日 發行

東京都小石川區音羽町六ノ十七
編輯部 磯部 滿 事
發行人 磯部 滿 事
東京都四谷區內藤町一
印刷人 山田 英 二
東京都小石川區音羽町八ノ十一
印刷所 新興印刷音羽工場 東京五九六
東京都神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社
東京都小石川區音羽町六ノ十七
發行所 法人 統 團
電話牛込五三三六番
東京九四二〇番
會員者號二二〇〇一〇號

一 統

版 戰 血 月 一 十 年 九 十 四 第

教化の大精神

諸惡作すこと莫れ 自ら其の意を淨ふす

衆善は奉行せよ 是れ諸佛の教なり。

然る所以は、諸惡作すこと莫れとは、是れ諸法の本にして便ち一切の善法を生ずるを以て心意清淨なり。是の故に迦葉よ、諸佛世尊は身・口・意・行常に清淨を修す。

迦葉問ふて曰く、云何が阿難よ、増一阿含は獨り三十七品及び諸法を出生し、餘の四阿含亦復出生するや。

阿難報じて言く、且らく置け迦葉よ、四阿含の義は、一偈の中に盡く諸佛の教及び諸支佛、聲聞の教を具足す。然る所以は「諸惡作すこと莫れ」とは、戒具の禁にして清白の行なり。「衆善を奉行し」心意清淨にして、「自ら其の意を淨ふす」とは、邪顯倒を除くなり。「是れ諸佛の教なり」とは、愚惑の想を去るなり。云何が迦葉よ、或清淨ならば意豈に不淨ならんや。意清淨なれば則ち顯倒せず、顯倒無きを以て愚惑の想滅し、諸の三十七の道品の果便ち成就するを得て、以て道果を成ぜん。豈に諸法に非らずや。一増一阿含經一

○迦葉 釋尊の十大弟子の一人。○阿難 釋尊の侍者。○四阿含 增一阿含、中阿含、長阿含、雜阿含。○諸支佛、聲聞 小乘修行の聖者。○三十七道品 四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道。(別項往題)

昭和十九年十一月一日發行 第五百九十六號

第二に未來生活の幸福といふものはどうしたら現はれるかといふと、これに就てやはり四つの方法を説かれて居る。即ち信仰と戒徳と布施と智慧である。この中で施といふものは戒の徳の中に攝せられるものである。戒は惡を戒めて善を勧めることであるから、その中には施といふ事も戒徳の一種として含まれる譯であるけれども、特に布施といふものを獨立して擧げられた。戒と施といふものは一つのものであるけれども、善根の中には布施の行が大事であるからそれを別出せられたのである。斯ういふのを總別兼擧と申して、總すれば戒、別すれば戒の徳の中に特に注意を要するものは布施といふので、戒と施といふものが出て居るのである。丁度日本で申せば道徳と、その道徳の中に於ては特に忠孝といふやうに、その中の善いものを特に抽出していふことがある。それと同様である。

お釋迦さまが信、戒、施、慧と擧げられたことは、實に大切な事柄である。大體は信仰と道徳と智慧の三つになるのであるが、現代の普通の人々が宗教、道徳、學問として考へて居るものをお釋迦さまはこの三つを併せて守るべきことを戒められて居るのである。信仰はドウいふ意味かと言へば、前に申す絕對の満足が即ち信仰である。如何なる事に出會うても心に苦みを受けないだけの有難さを心に握り得た場合を申すのである。それには無論佛さまの有難い事と、自分に有つて居る一番立派な佛性が顯はれて出ること信することによつて、絕對満足といふものが顯はれて来る。對手に就て言へば佛を信することが信仰である。自己に就て言へば自分の佛性を顯はすことの確立したことはれ信仰である。左様にして自己に於て自分の佛に成り得るといふことを信じ、又對手の佛の力を信じてその兩方の力に於て確信せられた所に佛教の信仰といふものがある。そこには一點も疑の心を有つたり、まごついたりしてはいかぬのである。自分は自分の有つて居る一番尊い佛性が顯はれて出るやうに、自分の身の方からも、佛さまの力の方からもまぎつて居るものであるといふ、その自己の成佛決定といふことを確信することが佛教の信仰である。それを或る時はサウ思つたり、又或る時はサウ思はなかつたりするやうな間は信不決定である。それは決定しない信仰である。信仰は決定しなければ何の價值も出て来ない。そこに力強く、自分は我が佛性が顯はれて佛に成り得るといふことを徹底的に、一徹の疑も加へずに、まごつきもなく深く信する。サウすればそこに歡喜が出て来るのである。他の事は如何に動いてもモウこれだけは動かぬ、天地は微塵になつて飛ぶことがあつても、自分の佛性が顯はれて出て佛に成るといふ事は、決して間違ひはない。この天地の間に存在する總ての物質の存在などは違つて、モット根本的の意味に於て我が成佛は確立して居るといふことを信する。そこから非常な強い歡喜が湧いて来るのである。それが絕對的の満足、絕對的の平和といふ事になつて現はれて来る。その點はモット突き進んで十分にお話をしなければならぬ大切な事であるが、先づ

今は一通りの話として、信とは左様なものであるといふことを申上げて置くのである。

それから戒徳といふのは、一切の惡を戒しめ、一切の善を勧めるのであるが、殊に實際問題としては布施といふことが一番大事なことになるので、餘れる力を施し、餘れる品物を施し、すべて自分に有るものを人に施すのである。これは何も金持が貧乏人を助ける爲めに錢を出すといふことだけを言ふのではない。一切の社會は施し合ひの關係で成立して居るものである。この頃盛んに言はれる共存共榮などといふやうな事も、やはり施し合ひから出て来ることであつて、自分は何も出さないで人の物だけ當てにして居りながら、口先だけで共存共榮といふやうなことを言ふ、それは甚だズルイ話である。何でも人の物を當てにして自分は何も出さない、御馳走を食べるので料理は他人が持へる、金は他人が出す、自分は養つて居つて何にもしない、それで御馳走だけ食はうといふ、それでは共存共榮ではない。共存共榮の名に依つて食ひ逃をするものである。所謂共存共榮といふやうなことは、自分が有つて居る物を他に與へなければ出て来ない。それ故に自分は何を世の中に與へ得るかといふことを第一に考へて見なければならぬ。さもないれば道徳といふものは生じて来ないのである。子としては親に孝行をしなければならぬといふ、その孝行といふ言葉だけ覚えて居つた所が何にもならぬ。自分の力、自分の有つて居る何物を親に與へるか、そこに始めて孝の道徳を生ずるのである。社會に對して言つたならば、自分は社會へ何物を與へるかといふことがなければ、社會の道徳は生じて来ない。夫婦の間でもその通りであつて、妻から夫に對して言つたならば、自分は何を夫に與へ得るか、如何にして夫を喜ばし、夫に幸福を感じさせ、それが爲めに夫の疲勞が直るとか、夫の勞力を省くとか、安心するとか、何物か妻が夫に與へ得るものがあつて、始めて夫に對する妻の道徳が成立つのである。唯だ夫を可愛がるといふだけで一切萬事夫に負さつて、夫に導かれ、夫の足手纏になるだけであつたならば、決して妻たるの道徳は成立たない。

それであるから一切の道徳といふものは、或る意味に於て言へば「施」といふ字で現はし得るのである。適當の方法に於て自分の力なり、自分の有する品物なりを施して行く所に道徳といふものがある。親子の間に於て言へば、親は子に對して慈愛を施し、子は孝養の心を以つて自分の有つて居る物を親に施して行く、そこに親子の道徳がある。夫婦の關係もやはりその通りで、夫が働いて得る所の金を以て妻の生活を保障すれば、妻は夫の疲勞を慰め、その心を安んずるといふことに依つて、そこに力の交換に依つて互に助け合つて居る所に、夫婦といふものは成立して居るのである。施す所なくして唯だ自分の方に奪るばかりで、それで道徳であるとか共存共榮であるとかいふことは出来ない。親からは大きくして貰ひ、夫からは飯を食はして貰ひ、社會からはいろいろの保護を受けながら、自分は何にもしないで唯だボカンとして居つて、而して「私は優しい考を有つて居ります」といふやうなことはかり言つて見た所が、何にもならん譯である。心は優しいかも知れんが世の中の厄介者である。

お釋迦さまは「施」といふことに依つて始めて道徳は成立つといふことを極論せられた。それをあらゆる問題に應用して行くといふ

と、今日の社會政策がドウであるとか、政治がドウであるとかいふやうなことも皆な適宜に解決されるのである。即ち政治上の力なり政策上の力に依つて、その施といふものを適宜に按排して行くのである。出すべき物を出さなければ背中をどやすなり、臂をつめるなりして、「お前は田さなければいかん」、「お前はまた出し方が足りない、十出さなければならん所を三つしか出さんからモット出せ」、「出さんければ斯うぢや」といふことになつて、今日の所謂税金といふやうなものが出来て来る譯である。これは本當を言つたならば税金も何もありません、お互が能く了解合つて、餘つた物を出し、餘計な物は返すといふことになれば、社會は一番圓滿に行くのである。それを共產主義のやうに、金持を破倒して財産を平均するとか、又今日の世の中の中やうに、皆金が金を情んで出さないのを原則として置くとかいふことは、どつちもいけない。お互が餘れる力を貢獻するといふことに依つて、モウ少し社會は穏やかに平和に行くだらうと思ふ。一軒の家の中で考へても、皆金が精を出して働けば仕事も早く片付いて、サウして皆が遊ぶ時間も共に出て来る譯だけれども、それを皆が忙しやうな顔をして、呼ばれた時だけはちよつとやるけれども、あとは隠れて勝手な事をやつて居る。親が子供を呼んでそこ等を掃除させやうと思ふても、「今は勉強が忙しいから」といふやうなことを言ふ。少しも忙しいことはない。結らん雑駁か何かを讀んで居る。皆なサウいふ變なことを言つて世の中を渡らうとするから社會が不道徳になるのである。人各々が能力を發揮してウツと働いて、サウして餘れる力を社會に施すといふことより他に、人生の平和はないものである。政治も經濟もそんな事は皮相の話である。人各々餘れる力が多量になつて、消費する分量よりも産出する力が多量にありさへしたならば、そこに人生の幸福といふものは必ず来るのである。であるから、お釋迦さまのやうなえらい人ばかりが世の中に居れば勿論問題はないが、そこ迄行かないでも、お釋迦さまの十分の一でも宜いから、お互ひがサウいふ氣持になることが出来たならば、社會は眞に幸福になる譯である。今日はお釋迦さまのやうな人は到底得られないけれども、釋尊の教を通して澤山のえらい人が出来て、そのえらい人が大勢を感化するのであるから、釋尊の教が世に普及することに依つて、人類の幸福といふものは多大に増加されたものである。日本に就て考へても、佛教といふものの感化が全然無くして、百姓の爺さん婆さんといふ者が、譯がわからないで我惚ばかりを突つ張つたならば、日本の世の中といふものはモット／＼ひどいものであつたらうと思ふ。そこに佛の教が傳はつて、信心を説き施を教へ、因果の理を語り來るの生命を説いて人心を和らげたことに於て、今日までの日本の社會がどれ程幸福に進んだか判らない譯である。

それから第四に智慧といふのは、いろ／＼大切な事柄に就て、その意味合が正しく了解されることをいふのである。その第一は人間の靈魂のこと、第二は神、佛のこと、第三はこの人生に於ける生活の意義といふか、精神生活と物質生活の調節を考へて、所謂人はパンばかりで生きて居るものではない、又信心ばかりで生きて居る譯にもいかな。どれほど有難いお經でも、食物を添らずにお經を讀んだりお題目を唱へて居つたならば、十日も二十日もそんな事をして居れば、貧血を起して倒れてしまふ。どれほど有難いお經でも、飯

を食はずに讀んで居つたならば、頭腦がグ／＼して必ず顛倒かへる。だから肉體を支へるものは食物であり、精神を導くものは信仰である。その調節をちやんと心得て行くことが即ち大智慧である。現代のやうにそれが一本槍になつてしまつて、信心をしたら金が儲かるだらう、金さへ儲かれば信心などするものか、俺は商賈がうまく行かんから信心するのだ、といふやうな亂暴な事を言つて居る。それは智慧の無い人である。如來の教に來る者は、そんな無茶な事をいふ者は我が教の門に入ることを許さないと釋尊は説かれた。今の佛敎の多くの坊さんや信者見たいな者は、強さうなことを言つても、お釋迦さまの前に行つたら門前拂ひをくつて中に進入することは出来ない。別に門番が居つて突き飛ばされる譯ではないけれども、佛の神通の力を以つて、そんな譯のわからぬ者が行くこと、その者の爲めにはその入口が非常に高いやうに思はれて、ドウしても上ることが出来ない。さういふことを能く了解せる者のみがその室内に入ることが出来る。所謂方丈といふのはそれである。「信心したら鏡が儲かるだらう、鏡が儲からないやうなら信心などするものか。」そんな馬鹿者を對手にして居つては仕方がない。お釋迦さまは至るところに教をお傳へなされたけれども、そんな好い加減な信者の數を殖やして、唯だ數の多いことを以つて威張らうといふやうなことを考へになつたものではない。本當の教をお傳へになつたものである。それ故にこの智慧といふことも餘程よく考へなければならぬ事である。

優婆夷淨行經の中に、優婆夷即ち女の佛敎信者たる者の心得を教へられた所にも、第一が信心、第二が精進、第三が智慧と説かれて、信心とは佛を信すること是れなり、精進とは善を行ふの心退轉せざること是れなり、智慧とは人生生活の意味合ひを觀破することである、即ち本當の人生觀が成立つことである、と説かれて居る。さういふ意味に於て、佛敎といふものは始めから終りまで正しき意味合ひを教へられて居るといふことが能くわかるのである。

新様にして信仰、戒徳、就中布施の行と、サウして智慧といふこの四つを十分に守つて行けば、死後の生活は必ず幸福になつて、佛に成ることが出来るとお教へになつた譯である。

そこで今世後世の勝益といふはドウ現はれて來るかといへば、これに依つて今世には生活の安穩が得られる、死後には永遠の悟に於いて眞の幸福を享けるといふことが佛敎の教へであるが、そこに尙ほ精神的の方面が強く教へられて居ることを附加して申上げて置きたい。これを忘れては駄目である。これが原則となつて心には信仰の光が輝いて行くのである。商賈せずに居つて信心だけでうまく行くといふやうな事を考へてはいかぬ。サウいふ常識的の教の所に今度信仰の威力が輝くことを如來は説くのである。それはドウいふことであるかといふと、信心に依つて現在には歡喜の華咲き、永遠には常樂の果結ぶと始終説かれる。一番に現はれて來るものは、現在生活の上に於ては、如何なる境遇事情に置かれても信心する者は歡喜の心に充ち満ちて居ることが出来る。サウして死後は常樂の果を結んで佛さまに成れる。斯ういふ事である。そこで現世の利益を一言にして言へば、歡喜の生活である。後世の利益は常樂の生活であ

る。これを幸福と吳報と申して、歡喜を華とし當樂を果とするのである。現世には歡喜の華が咲いて、死んでから先はいつも楽しい佛に成れるといふのであるが、その歡喜といふのはドウして信心すれば出て来るかといふことをモット合理的に考へる必要がある。「それは信心したら有難いから有難い思はれて来るのぢや……」そんなことを唯だ言つても駄目である。即ち佛敎の信心をすれば、人生に對する悲觀の側に於ても、樂觀の側に於ても、苦樂を超越したる觀方、即ち超越觀の上に於ても、何時でも歡喜の心を維持することが出来る譯なのである。悲觀の側といふのはドウいふことかと申せば、人生にいろ／＼苦しい事、悲しい事があるが、併し佛の教を信じて居ると、人生の悲觀すべき事、或は苦痛を感じすべき事がチウ感じない、歡喜を以つてこれに對することが出来る。そこが最もよいところである。普通人の悲しむべき事、苦しむべき事が、佛法を信じて居る爲めにその苦を受けない。それはどんな事であるか、一つ譬喩を擧げて話すと能く判る。

例へば今學校の運動會があるとか、遠足があるとかいふ場合に、自分の娘が喜んで出かけようとして居る。甲の娘の母親は「今日はお前は鎌倉へ遠足に行くといふけれども、空模様が少し變だから餘り良い着物を着て行つたら、途中で雨が降つて来た時に困るから、濡れても差支ない着物を着て、チウして面倒なやうだけれども、合羽を持って行くなり傘を持って行くなりして、途中で雨が降つてもマゴツかやぬうにするが宜からう」と言つて能く注意をして居る。乙の娘の母親は何の注意も與へずして「チア今日はお前は鎌倉に行くのだ。鎌倉はナカ／＼景色の佳い所で見るところが澤山あるだらう、面白からう」と言つて娘と同じ様にソワ／＼して、何の用意もしないで出してやる。それから皆なが鎌倉に下りて、少しばかり驛から歩いて行くと、果して雨がデアツと降つて来た。チウすると何の用意もして居らない娘は、「アラ雨が降つて来た、ドウしませう」と言つて狼狽へて居る。一方の娘は母親がちゃんと注意をして呉れてあるので「ア、降つて来たナ」と思ふから合羽を擴げて着るなり、傘をさすなりして平氣で居る。チウいふ風に用意の無い人間はその事に出會うて非常に狼狽へて居るけれども、自分は假令雨が降つても用意があるから、ニツコリ笑つて居ることが出来る。新しいふ事が佛法の教として非常に有難いところナンである。

この譬喩は極く卑近な話であるが、これをモット／＼複雑な事柄に進めて行つて諸君が考へたならば能くわかるであらうと思ふ。釋迦牟尼の教はちやうどその通りに、人生觀の上に於て人生の缺陷、人生のいろ／＼不如意なる事柄を指摘して、チウして如何なる事に出會うても徒らに驚き狼狽することのないやうに、恐怖を懐くことのないやうに導いて置くものであるといふことを説かれて居るのである。だから、これを下手に聽くといふと何だか馬鹿らしく聞える。遠足に行く場合でも、娘が馬鹿であるといふと、折角自分が愉快に鎌倉に行かうといふのに、イヤ雨が降るの、合羽を持って行けのナンと言はれる。うるさいお母さんだと斯ういふ風に馬鹿な娘は思ふのである。利口な娘であれば、ア、家のお母さんは能く注意して下さつた。假に雨が降らずに合羽は荷物になつて歸つて来たらしいふ事が佛法の教として非常に有難いところナンである。

したところが、幸に今日は途中から暗れたけれども、若し降つたならばお母さんの注意して下さつたのが有難かつたのだと思つて、雨合羽を使はないでも感謝するやうな娘と、世の中にはこの二通りがあるのである。

そこで佛法を信心せぬやうな者の態度は、唯だ平生は無事に行けばそれでよい、何か事が出来るといふと忽ち狼狽して非常な悲しみ、苦しみを感ずる。世の中の學者だとか、相當な人間だといはれる者が、自殺をしたりするのは皆それである。

街頭の一聲

平山三藏

○尊嚴なる我が國體は天地の精神と照應す。世界救済の重大使命は皇國の双肩にあり。神州男子よ、機は再び來らず、潜在的な精神力を發揮する今日に非らずして何れの時ぞ。

○深刻苛烈なる激戦下、父母祖先の記念祭に遇ふ。感激更に深し。吾等の一舉一動、皇國の興廢に關するを思ふとき、心血を君國に捧げ、父母の心臓に回向せん哉。

○現下の血戦は四海同胞、共存共榮、報恩主義と、侵略擄取非法なる個人主義の激突なり。敵の魂滅を視ずんば、我が玉碎あるのみ。身命財を捧ぐる者は皇民なり、巧利主義のトーチカに籠居する者は米英の與黨なり。日本人よ日本に還れ!

出征する友に

金城三郎

○誦餘怨敵皆悉摧滅と法華經の文字書きやりぬ族に大きく。
○野も山もおのがあるところはいづ方も佛いまして護り給ふと。

偶感

○人にしてほとけ心の失するときは鬼にも蛇にもなりて世をはむ。
○わが友は經本持ちてはるばると海山越えて他國に入れり。
○櫻卷を閉づに忍びず更くる夜を惜しまず願みぬ有難や教。

國防の根本要義

和 賀 義 見

(下)

國防の本義が我が無窮の國體に其の基調を存し、然して神皇正統一貫の天皇を奉戴して居る事實と、億兆一心の忠誠とが國體の精華であつて、國防の根本要諦が確固として動ぜざる所以のもの眞に秀眞の國の名稱にそむかず、他國にその類例を見ない所である。然るに人心動もすればその本心を忘れ、實相を見る能はず、實へ根本慾望に蔽はるゝが故に、その人生觀、世界觀、宇宙觀に缺陷を賣らし、その見解、その思惟、その行爲等が政治産業經濟等國民生活の總てに反映して、遂にあらゆる部門に廢路を生じ來るに至る。若しそれ人心昏迷して使命を忘れ、責任を免れて愧ぢず、或は宿命觀に墮し、或は偶然論に陥り、或は萬一を僥倖とし或は唯物論に、或は無靈魂思想等々に陥り、人心の頹廢、動搖、邪念にかられるならば、何をもちてか國防の完璧を期し得られよう。故に正しき信念、正しき思想、正しき教を以て國防の基本條件と爲さねばならぬのである。

長阿含經に、戰に於て破るべからざる國として七ヶ條を擧げて説かれてある。

佛、阿難に告げたまはく、國人しばく相集會して正事を講義するを聞きしや否や。答へて曰さく之を聞けり。佛、阿難に告げたまはく、もし能く然らば長幼和順してうたゝ更に増盛して因するのである。

六に國門眞正純潔にして穢れなくとあるが、夫婦相和するの道も此處に始まり、子弟の教育、健全なる子孫の繁榮もまた此處に因するのである。

七に沙門に宗事し、戒を敬事するものを護養すとは、正しき宗教を尊び之を護養するの意義である。

以上の七ヶ條は我國古來の美風を讃歌せる文なるが如くに感受せらる處であつて、宗教・道義・政道の三者が渾然として融合し調節せらるべきことを指示して居るのである。

惟ふに我が國の文化は神佛三教の調節の上に立つて居るが、これこそ我が國民精神を豊かにし、その内容を充實せしめ、生成發展の徳風を助長せしめ來つたのである。儒教來れば之れを容れてその長を取り、佛傳來すれば之を彌してその新精神を發揚し來る。此の三教調節の根柢に立つて歐米思想をも開顯し、世界人類を指導し教濟すべき大文明を完成するの使命、我國を措いて他に之を求むることが出来ない。

今次の大東亞戰爭の内面的意義に於ては、當に此理想を實現せんとする所にある。されば我國にあつては上宮太子、三教融合の教化を交流せしめて、内豪族の對立、部族政治の弊害その極に達し、名分地に墮ちんとし大義廢るゝを憂ひ、外には新興隣國との餘威四隣を歴し、終に我國をも侵さんとするの微を露呈するに到つた時、憲法十七ヶ條を制定して、『國を承けては必ず謹しめ』の大義の下、舉國一體の體制を整へ、終に外敵をして窺はしむるの機會を與へなかつたのみならず、我國の文化今日を成すの根柢

その國久しく安らかならん。能く侵損するもの無けん。君臣和順し上下相敬ふを聞きしや。法を奉じ忌を曉り禮度に違はざるを聞きしや。父母に孝事し師長に敬順なるを聞きしや。宗廟泰ひ敬を神明に致すを聞きしや。國門眞正純潔にして穢れなく戲笑に致つても言邪に及ばざるを聞きしや。沙門に宗事し戒を敬事するものを護養し未だ曾つて愆愆せざるを聞きしや。答へて曰さく之を聞けり。阿難もし能く然らば長幼和してうたゝ更に増盛しその國久しく安うして能く侵損するものなけん。云々。

即ち一に相集會して正事を講義すとのあるが、政道の要諦、民力の向上、國家萬民の充實と運営は正事を相講じ協力和議する所より始まるのである。

二には君臣和順して上下相敬ふとある。即ち君臣一體となり、上下互に人格を尊重し合ふ所に舉國一體の體制が整ひ、軍官民の眞の協力が實現し得られるのである。

三に法を奉じ忌を曉り禮度に違はずとある如く、國風國法を重んじ禮節を尊ぶ事健全なる國民生活の要素であらねばならぬ。

四に父母に孝事し、師長に敬順すとは、家族主義國、道義國として素より必須の重要事であらねばならない。孝養を盡さず老ひたる父母を慮ぐるが如きは國法を以て治罰すべしと佛具は教へて居る。弟子は其の師を輕んじ、師また人格徳望を缺くが故に教育は頹廢するのである。

五に宗廟を恭ひ敬を神明に致すとあり、若し神祇を恭はず、祖先を尊はず、その祀を絶やすに於ては、愛國心の涵養は認め得ざるに到るべく、また祖先崇拜の美風もこれより毀らるゝに至るのを礙いたのである。

その憲法第二條「篤く三寶を敬へ」の條項は對立相對の弊を拂拭して、舉國一體の態勢を整備し、國民教養の上に佛敎を以てせざんばならずとせられたるものであつて、私を虚しうして詔の下必ず謹み拳々服膺して臣道を全うするの業地を教養すべく、いかに力を注がせ給ひしかを仰ぎ知るに足る。歷世佛敎を篤く尊信し給ひ、教化を下に被らしめ給ふ仁徳相襲けてつぎ、殊に法華經は護國國家の聖典として尊重せられ、忠臣良將亦篤く信を致し、背私向公忠誠を捧げ來つたのである。

立 正 安 國

日靈聖人は承久禍亂の後を承け大義は溷晦し、大道當に廢たれんとするかの國狀を憂ひ、内、天變地天頹りに到つて萬民塗炭の苦しみ沈むを悲しみ、外、蒙古侵寇の野望を遏まらうして神洲皇土を侵かさんとするを未萌に知つて、是れが根本臣教の方途を立正安國論に收め以て鎌倉幕府を諷諭し、當時の指導階級たる佛敎各派の過まりを指摘して之を折伏し、國體の正義と、佛敎の正統とを顯はし、以て國內の體制を整へ、皇國を萬代不易に守り、外、蒙古侵寇の野望を降服して皇國を中心とせる世界平和の實現を計らんとしたのである。凡そ外敵を擊碎する事も、或は外交克く國際關係を調節する事も、乃至萬邦を導いてその處を得せしむるの方途も、要は國力の充實とその發展の力に俟たなければならぬのである。而してそれは大道に基づく皇運の彌榮に根柢を存す。天壤無窮の皇運を誦賀し率まつるは、やがて萬邦をして各々

その處に安住せしめ、世界一大平和の實現に寄與する所以となる。しかも天業實現の大業は神洲國民の自覺覺他實行に俟たざれば此の一大使命の達成は望み得ないのである。此處に獨斷と固陋とを認めなければならぬのである。道は古今に通じて謬ならず、中外に施して悖らざる所以を覺知すべきである。邪は正に克ち難く、惡は永久に榮ゆることが出来ない。修善の者は上より、造惡の者は墮つる因果の理、天地の實相これを欺むことが出来ないものである。正に背むくが故に惡を造るのである。惡は遂に佛神の欲せざる所、聖賢の黨みせざる所である。理りに背むくが故に惡は跳梁し、人心は亂れ、災厄は頻りに到る。

されば日蓮聖人は國難の因つて生ずる原因を指搦して、世皆正に背き人悉く惡に歸す、故に善神國を捨て、相去り、聖人所を辭して還らず、是を以て魔來り鬼來り、災起り難起る。と警告せられた。しかも惡となす所以のものは、一には一實の中心を失なへるが故、二には局部を取つて全體を捨つるが故、三には秩序を亂るが故に、四には排他迎合なるが故に、五には自主包圍無きが故に、六には理想と現實の調和なきが故に、七には時處位の宜しきに適はざるが故、八には使命の自覺なきが故である。以上の内、一を擧げても眞を過するのである。

しかるに其の悉くを擧げ來る時、如何に其の災の恐る可きものであるかを知るに足る。故にかゝる者に對して根を斷り源を塞ぐの對治を施らざなければ、萬祈を修するとも驗しなく、禍亂彌や繁く、國難益々荷重せらるゝ事を戒められた。其の折伏の法政を打つて時の宗教界を愕然反省せしめたのであつた。

とは日蓮聖人の法を知り國を思ふの時肝より送り出づる熱誠そのものでなくて何であらう。國家興隆の元は正しき教に基く人心の健全によらなければならぬ。されば國は良き教と、健全なる國民を以て榮へ、良き教へは國家興隆のために裨益し、國民の人格を健全に導くものであり、人は明教を奉じて奉公報國の誠を捧げなければならぬのである。國家亡び民族滅亡するに至らば、佛法ありと雖も唯か之を崇む可き、道ありと雖も唯かそれを信受するものがあらう。故に正しき宗教の態度は先づ國家を祈りて佛法を立つ可しと示された態度を要するのである。しかも正なる所以のものは相對的の見地に立つて居るものではなく、むしろ是等の相對的立場から更に高所に立ち、しかして一切を活かし開顯する立場に立つのである。これを最高義とも絕對善とも稱するのである。相對善を以て絕對善に反するが故に正しい判斷を過し去り誤れる言行に立つに至る。彼の鎌倉時代を禮讚するが如きは、武族時代の弊害や攝關政治の弊風、公卿執政の其等に相對比較しての論據であつて、皇國政道の本義のそれと比肩せしめて同一次元に於て論ずべきものではないのである。

今法華經の經釋の中に於て己に説き、今説き、當に説かんとする三説に超過して最も其の上にあるとは、佛陀釋尊の金言であり然も其の内容に於て上來述べ來る弊害を除き、斷片的獨立の局部的對立的宗教觀を改めて、綜合的包圍的統一開顯の妙旨を發揚顯現し來る所にある。其の云ふ所の統一とは、確立せられたる中心より整然たる秩序の下、一切を綜合し一大體系を完成するの謂であり、開顯とは一切各々其の所、其の位に住しつゝ全分の價值體

四箇の格言の如きは、今日論駁試すべき思想動向である。即ち其の一は獨斷より來る傲慢であり、二は責任を忘れた厭世思想であり遁入思想である。その三は中心を過した混亂思想であり、其の四は小節によつて大節を忘れ、小徳にかゝつて大本を棄るの輩である。

擧るべきは世間に於て宗教の何たるかを解せざるが故に、假令宗教を擁護するが如くに見ゆるも、かへつて宗教の眞精神を染曲せしめたり、或は宗教家にして權力や利益の下に迎合し、世を導くの本分を忘るゝものならずである。

彼の排佛論者が佛教を目して人生から通れ様とするものであり種族を絶やす邪教であると痛罵して居るが、彼等が佛教の眞精神を解し得ず、皮相の見解を以て深淵なる佛教を破却し去らんとしたのは佛教の災禍と云ふよりも、寧ろ國家の損害であつたのである。

しかし乍ら其の實は早り排佛論者のみにあつたと云ふばかりでなく、佛教それ自體の中に師子身中の蟲があつて、師子の身を破るが如く佛教をして活力なき斷片的氣安め宗教となし、國家興隆の爲に裨益す可き明教を過し、自ら殘存を抱いてこれ佛教なりと云ひ、或は國家の大事を解せず一身の安逸を宗教によつて計らんとするが如き徒輩のために佛教は誤られたのである。

國を失ひ家を滅しなばいづれの所にか世を運れん。それ國は法に依つて昌へ、法は人に因つて衰し、國亡び人滅せば佛をば唯か崇むべき、法をば唯か信すべけんや、先づ國家を祈りて須らく佛法を立つべし。

力を最高度に發揮するの謂である。統一によつて開顯の働きが現され、開顯によつて統一の眞義が顯動し來る。この一大體系と運用の妙所が遺憾なく發現せらるゝことによつて、釋尊の經説が部分的局部的斷片的教の集積ではなく、綜合的統一的大宗教たることが明かにせられたのである。されば統一と云ふ意義は世間に誤られて用ひられて居る様な意義、即ち征服思想や強力主義や壓制的態度や等々のそれではない。開顯の意義もいわゆる自由主義や混亂思想等々のそれでもないのである。よく個々の各々が内に蔵する力と價值とを全分に顯現すると共に、同時にしかも即して整然たる一大體系を持つて、最高中心より起用する力を以て、一大生命の大活動を開顯するのである。

惟ふに大和と云ひ、總和と云ひ、舉國一體と云ひ、國家總力の發揮と云ひ、皆國體の本義に基き、御後威の下、整然たる秩序を以て德光綜合包圍せられて、統一體系を完備せるそのまゝに、しかもよく其分に於て其の所に於て物心一如、全分の備きと價值とを現はして皇運を扶翼し奉る姿こそ、即ち大和の姿、總力發揮の實相であると確信するのである。

日蓮聖人が「早く信仰の守心を改めて速かに實業の一善に歸せよ、然れば則ち三界は皆佛國なり、佛國其れ衰へんや、十方悉く寶土なり、寶土何ぞ壞れんや、國に衰微なく土に破壊なくんば、身は是れ安全にして、心は是れ穩定ならん、此詞此言信すべく崇むべし」と立正安國論に示された教説は、まことによく一切の災を消し、難を止むるの道であると共に、國家無窮の安泰を祈る大策であり、外敵調伏の鍵論である。

下界の一念三千論

朝、社長が會社に出動する。社員の見識が一勢に鋭く注がれる。社長の退屈したる時は、社員も何となくゆつたりした気分になつて、和氣藹々たる仕事が開演する。社長の御機嫌大いに斜にして尖つてゐると忽ち全社員が警戒をせねばならぬ。仕事も職々鼓々たる姿態を現する。斯うして社長の一舉手、一投足が全社の氣分を左右する。此の氣分の集積がその會社の個性となり、成績となり、是の如き果となる。

そこで社長の陣頭指揮といふ事が、増産戦線に強く叫ばれてゐるが、此の社長様の指揮が焦々したり、突慥であつたりしては其の指揮は何にもならない。結局陣頭指揮に従つて、全員が和氣一心となつて、全生産を發揮する爲めには、社長自らの一念が、和氣に満ち、仁恵心に満ち、勇氣凛々たるものがなくては、増産の陣頭指揮にはならない。

斯んな卑近な例を擧げてみて、一念三千の眞理の何んなに平凡にして、而も深いものか々合點される。天台の「今の一念何處に行くや」の修業を、我々が日々行動一切に深く反省する時、全く恐ろしい位、嚴然一念三千の眞理が開示されてゐることに驚く。斯ういふ事がある。よく鐵山などで、落勢や轟故で怪我や死人を出す。そこで其原因をよく調べて見ると、絶対不可避の天災の

實 踐 の 宗 教

磯 部 滿 事

九月末、讀賣報知に「宗教家の任務」の社説があつた。夫れに依れば、「今度大日本戰時宗教報國會が結成されたことは結構なことである。併し國民の間には既に地域及び職域による組織があつて、夫々の方式をもつて動員を行つてゐるし、今更宗教による組織を俟たねばならぬ餘力が残つてゐると思はれない。深くこの間の事情を考慮して、宗教の特質を十分に生かした特別の方式を工夫するのなければ、徒らに屋上屋を架することになり、國民組織の救ひ難い混亂を招くことになり。由來宗教が昔日の力を失つたのは、近代科學がその機能の大半を奪つたからであり、寺院や教會が無力になつたのも、その仕事に國家、學校その他によつて果されるに至つたからである。……今若し既成の諸宗教がその力を回復しようとするなら、それは國民がその胸に抱いてゐる種々の煩悶の相談相手になるといふ以外に道はない。死とか來世とかの問題よりも、生きた國民の一身上の問題、家庭内部の面倒な問題、近隣の交際に生れる色々の問題によつて行かねばならぬ。これは科學や技術が如何に進歩しても、人間の限り決して絶えるものではない」等々あつたが、要するに宗教が現實生活から離れて、高い理想や生命問題を担ね廻して居らずに、モット人々の胸中に飛び込んで苦を抜き樂を興へるやうにして、人生を幸福に導くやう努力すべきであるといふ主張に讀めた。

場合もあるが、一番多くは、職夫の一寸した不注意にある。その不注意もよく調査すると、朝女房と喧嘩して、むしやくしやしながら入坑したため、つい用心すべきを怠つたりして、落勢などにしてやられる場合が非常に多い。即ち家庭に於ける朝の不快なる一念が、忽ち悲しい運命の結果を招いて仕舞ふ。

斯うなると社長の陣頭指揮は勿論、坑夫の仕事に至る迄等々の三千の世界の諸問題は、悉く吾等の一念の展開といふ事に間違ひない。そうすると、結局は、我等の此の一念の使ひ方、即ち詮じ詰めるに精神の働き、思想の持ち方が殆んどこの根本といふ事になる。地獄行き的心を使へば、どうしても地獄の眞中へ落ち込むに間違ひない。

其處で時局下必勝の極意は、先づ此の我等の平素の一念を、信仰の大光明に照して置く事だ。信仰の燈を掲げずして、暗い氣分で行く力んでも好い智慧、力が出るものではない。清く明るいがすがすがしい氣分で、さあやう、さあ来い！と雄々しく立ち上るところにこそ、一切の勇氣、智慧が湧いて来る。

我々は今日から、絶対泣き事は云ふまい。不平はよさう。そして夢にも安逸の氣分など出してはいけない。

日本は絶対に勝つ！の確信を以て、歩々々々本佛信仰の輝きに浸らう。何時死んでも喜んで鐵山へ往詣しやう。何んな惡魔もやつて来い。蛇鬼も襲つて来い。我題目の金剛杖で忽ち粉砕せん。總てを大きい本佛の光明に捧げて、只管勝利の一端を獲進しやう。本佛國の光明に抱かれて、信念支持の一念三千を實踐しやう。然らば三界は佛國と展開しやう。十方は實土と建設されん。

佛教が今日のやうに實生活から離れて恰度「二階から目薬」といふ態度は、畢竟阿含實踐の教化を蔑ろにした結果で、佛教の正系は阿含、法華、涅槃だといふことは、本多大僧正學生の叫びであつたのである。「阿含」といふのは、「法藏」又は「淨教」とも譯する。これは佛教の總府で諸法の法藏總趣であり、他に肩を並べるもの無き淨教であるといふ意味である。さうして釋尊の説かれた時所は、たゞ鹿野苑に於ける十二年間に限つて居るのではなく、其の御一代五十年の説法に互つて居るから、場所も各方面であつたこと勿論である。世の中には阿含經は小乘だ、酒極的、厭世的、であり退嬰的の教義だといつて輕蔑する者も多いが、そこに現實生活と佛教とが離れる因縁となつたものと想はれる。釋尊の教はソナ偏狹なことを説かれたものではない、過去のことから現在に及び、更に將來に互る三世一貫した教であるが、しかも其の中でも現在のことが本論とさるべきは當然のことである。「我は度世の要道を説く」、「皆苦を離れて、安穩の樂、世間の樂、及び涅槃の樂を得せしむ」と仰せられて、單に死の問題とか、未來觀とかの一方に片寄つた教ではない。現世は安穩であり、後生は善處といふことは個人だけでなく、草木國土にも及ぶ實に廣大な思想である。

ところが折角の明教も、之を傳弘する者が間違つた私見を加へて傳へることが罪深い事となる。世の人はその疑が判らないから佛の教を蔑視するが、たとへば立派な道路が造られてゐるにも拘らず、田舎者が道に迷つて、「何だ此の道は怪しからん」といふやうなものである。日蓮聖人が「日蓮は正直者だから、釋尊の御

意のまゝを率直にお傳へするばかりだ」と仰せられた語は深く味ふべきである。

そこで如何によい教であつても實行せねば何の價値もないのである。楞嚴經に、『多聞ありと雖も若し修行せざれば不聞と等し、人の食を説くも終に飽くこと能はざるが如し。』と説かれ、智度論にも、『佛法は行を貴ぶ、不行を貴はず、但能く動行せば穢ひ寡聞なるも亦先ち道に入る』とあるやうに、實踐こそ肝要である。佛教の行法は清げると小乘に七十五法あり、大乘に百法もあり、更に八萬四千の法門が展開されて居るが、之を統合する時自ら適當の行要を結し得られるので、それは巻頭に示されるやうに、我が心を護る此の一つの根本から順次擴がつて三十七法に及ぶ。これが吾々日常の心がけとして其の要を得たものである。それだから法華經には『佛に成るべき助道の法』だと示されて居る。即ち凡夫の吾々が、佛の境界に到達する迄の間に履行すべき道筋なんである。助道とは助成の意味で、自分等が傾倒したり、悲觀したり、苦み憤むのは畢竟智慧がないから却り憚りだから、佛のやうに一切の物事が本當に解れば迷ふことはない、苦惱はない。さういふ大覺の佛陀の境界に迄、人を仕上げて行く大切な條件が即ち助道の法である。

私等が人格を完成して行くには一足飛びに達し得られる筈はないから、始めは極く低い所から勵んで行くべきである。日蓮聖人の仰せの通り、理想は高く、實行は眼前の小さい事から眞面目に盡す。その一歩々々が徳を積み功を果ねる極めて大切なのである。それで三十七道品の教をこゝに少しく立入つて申したいと思ふ。

五根といふ根の意味は、覺りを得る根となる修行の仕方である。一には『信根』といつて深く佛の教を信じて疑はないこと。二には『精進根』で、其の正道及び助道法に對して混り氣なく實行を期すること。三には『念根』、一度學んだことは能く憶念して忘れないやうにすること。四には『定根』といつて志念決定して更に散亂動搖せず、教を實踐すべく専ら思つて居ること。五には『慧根』である。即ち本心が醒悟して一切のもの、眞相を究め盡すことに力を用ふるので、此の五根が活躍すると、種々の障礙を除く力が具はつて来る。それが次の五力である。

五力とは、一には『信力』に依つて邪説を打破る力。二には『精進力』に依つて懈怠の念を打破ることが出来る。三には『念力』に依つて正道に反する邪念を打破る力。四には『定力』に依るからガラ／＼する心の混亂を除却する力。五には『慧力』に依つて人たる本性が覺醒するから、自己中心の諸の染業が打破られる。これ迄の事柄だけでも、能くその深い意義を領得して身に行へば、毎日法悦感滿の生活が營まれるが、更に『覺』と『道』が説かれるのである。是等の中には前にあつたものと重複するが、それは正しい覺を得る方法をいろいろの方面から教へられるのであるから、たとへ重複の點があつても結構で、吾々は度々示教されて漸く身に沁み込んで来るのである。

七覺支又は七覺分ともいふ、これは正しい覺を得る爲に特に心

つたのであるが、紙面に割せられてホンノ大體の項目を示す程度であるけれど、繰返し能く觀察する時に幾分づゝでも實行に移る便となるであらうと思ふ。

三十七道品とは、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道をいふのである。

四念處といふのは、四つの念處、念は能く觀する心である。處は觀する所の境地をいふのである。其の四とは第一、此の身の不淨であることを觀する『觀身不淨』である。第二、吾々日常感覺の生活は苦痛であることを觀する『觀受是苦』である。第三、自分の精神がいつも動搖して全く頼み難いことを觀する『觀心無常』である。第四、此の世の中の一切のものは流轉せることを觀する『觀法無我』である。

四正勤といふのは、正は人生の眞意義に順應すること、勤は懈怠ならざること。これに四あつて其の一は、已に生じた惡は之を斷じて再び繰返さぬやうにすること。其二は、未だ生ぜざる惡は能く防止して起さぬやうに注意すること。其三は、前に善い事をしたその善を益々培養すること。其四は、未生の善も大に之を啓發せしめるやうにすることである。

四如意足といふのは、意に思ふやうな願を満足せしめるに就ての四つの法をいふのである。第一は『欲如意足』である。人は劣欲に執著する時に苦むので、こゝの欲は正善の欲、即ち人を濟ひ世を利すべき欲である。第二は『念如意足』といつて、正念を確立してガラ／＼せないやうにする。それには自己中心でなく、佛の心持を我が心とすることである。第三は『進如意足』で、よい

を用るなければならぬ點を説かれたもので、支とは枝の義であり分とは部分の意味である。即ち枝が集まつて樹の全體を成し、部分が集まつて完備するやうに、この七つのことを大事にして怠らなければ正覺が成せられるといふのである。一には『擇法覺支』といつて初めに法を擇ぶことを懇説されたことは、深く注意すべき事である。二には『精進覺支』で、正しい法を擇ぶことが出来れば、怠らず眞剣に之を信じて努力を續けること。三には『喜覺支』といつて精進する結果、必ずよい果報を得て喜ぶ、所謂法悦を感ずるやうになるのである。四には『輕安覺支』といつて歡喜の心が發ればドンナ場合にも愉快で、輕快に終始する。五には『念覺支』、六には『定覺支』、いづれも前にあつた念根、定根と同じ意味である。七には『行捨覺支』で、捨てることの出来る境界をいふのである。即ち外に向つて求めるといふ心がスツカリ無くなつた時、それが行捨である。斯ういふ心持でこそ本當の仕事が出来ると譯である。

八正道のことはモウ紙面が無いから項目だけを申して、いづれ他日を期することにする。即ち正見、正思惟、正語、正業、正命(命は生活のこと)、正精進、正念、正定である。

以上多くの項目が示されて居るが、全部を擧げて實行することは最初は望めないにしても、其の中のいづれか最も行ひ易いものから段々と修行を重ねて行く時、その生活様式は必ず一變して、物資不足でも苦にならず、處世の上に煩悶とか、神經衰弱は一掃されて、明るい愉快な世の中となり、四恩報答にいそしむことが出来る。要は實踐にある。

本部 團報

○日蓮聖人のお會式を十月十五日午後一時半、本部御寶前に遷修することが出来て有難い事に思ふ。法要後顧問理事の開會挨拶後、先頃南方から一年振りで歸京された矢崎庵夫先生の「南方證談」に一同感銘深く聴聞し、最後和實上人の閉會の辭で終り、各各位へ信心増進の爲に法要経要品が施本された。

○最近惜しい方が、しかも急逝される。其の中でも山田博士の繁子夫人が他界されたことは、教界の上にも於ても悲しい凶事であつた。本多上人と夫人、夫人と本團の深重な因縁は世の中に殆んど知られてない。それはすべてに於て謙讓な、直心、元政上人のお氣持からと思ふ。随つて、私共は益々道念に勵むつて自行化他に精進のお氣持に添ふものと思ふが、本月四日は第百ヶ日忌に相當するから、今種みて法恩を深謝し、其の佛衣菩提をお祈り申上げる。

○去る十月十二日、日蓮聖人お會式聖日に當り、敵米五十八部隊が大機動部隊を以て

不遜にも琉球及び臺灣方面に來襲したが、甚大なる打撃を蒙つて潰滅するに至つたことは轉た感深いものがある。而かも頑敵人の常である。快報の陰には幾多なき犠牲がある。今帝國の大祭に臨み特に感觸切なるものがある。ア、信なき者國を損ふ敵。

○本團の榮田理事は、先日慈父の第十七回忌に當り、諸事不如意の中から種々苦心されて追孝供養の佛事を営まれた。物資潤澤の時と異り極めて不便の中に親を憶ふ一念から、萬事に配慮工夫するそこに大孝の實を見て涙ぐましく有難い事であつた。又本團御寶前へ金一封御供へ下さつた。

○其の他大阪の東峰太郎氏、横濱の吉田しげ子夫人、帝都の小峰豊子夫人等より夫れ々送られた精進道善菩提の爲に、御寶前に淨衣御供養たまはつた。これにつけても私共は益々道念に勵むつて自行化他に精進すべきことを痛感する。

○毎月例會や、教務部編輯會等のごこと今回特報することを避ける。何しる本誌の一行でも見取を購読すべき

當り、敵米五十八部隊が大機動部隊を以て砲撃と等しい貴重なるものであるから、これ

でも私共並の一滴である。○最近の戦果に醉へる人々、一喜一憂は小人の常である。快報の陰には幾多なき犠牲がある。今帝國の大祭に臨み特に感觸切なるものがある。ア、信なき者國を損ふ敵。

一統 一 部總金二十錢 送料二錢
半ヶ年 金一圓二十錢 送料共
一ヶ年 金二圓二十錢 送料共

昭和十九年十月二十七日 印刷納本
昭和十九年十一月一日 發行

東京都小石川區音羽町六ノ十七
發行所 磯部 滿 事
東京都四谷區内藤町一
印刷人 山田 英 二

東京都小石川區音羽町八ノ十一
印刷所 新興印刷音羽工場 東京五九六
東京都神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版印刷株式會社

東京都小石川區音羽町六ノ十七
發行所 財團 一統 團
法人 統 團
電話 牛込五三三六番
東京九四二〇番
會員番號 二二五二二二番

一統

版戰血 月二十年九十四第

勇猛 精進

丈夫は寧ろ當に回駁して死すべし
健兒既に能く他を降伏せんに
唯だ健は能く諸の怨敵を破る

我れ當に久しからずして汝敵を降さん

第二を名けて不歡喜と爲す

愛者は是を第四軍と名く

驚怖恐畏は是れ第六なり

顯悲忿怒は第八軍なり

愚痴無知は是れ第十なり

十二は恒に當に他人を毀るなり

軍馬悉く皆黑暗を行く

一切天人の類を迷惑す

妙智慧を以て降兵を嚴にし

盡く汝の大軍衆を破らんこと

汝が軍を消滅せんこと亦復然り

智慧方便皆成就す

佛本行集經一

汝の軍は第一に是れ欲貪なり
第三は飢渴寒熱等なり
第五は即ち彼の睡と及び眠なり
第七は是れ狐疑の惑ひにして
顛利及び爭名は第九なり
自譽矜高は第十一なり
汝句よ汝等の眷屬も然かなり
汝の軍は恒に世間に行して
我れ今汝の彼の軍馬を見る
悉く能く降伏して餘り無からしめん
吾は水の杯瓶の器を破るが如し
我が心正念にして安きこと山の如し

終ひに命在つて他の爲に降らず
降し已つて更に復何の畏る所ぞ